

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集: FXニュースレター

執筆担当: 斎藤登美夫



◆◆◆ No.0570 ◆◆◆

20/02/05

【 2月、経験則からの「大相場期待」も 】

1月のドル/円相場が経験則的にみて「ドル安・円高有利」であるのは、1月8日付の当レターでも報じるなど周知のとおり。しかし、一時110円台を回復した際には、今年はさすがに経験則が外れるかと思いきや、最後の最後、月末1月31日のドル急落を持ち、なんと月足が陰線引けとなった。「過去の経験則、恐るべし」—と言えるかもしれない。

さて、そんな1月相場を受けた、足もと2月はいったいどう動くのか。先月同様、過去の経験則を参考にすれば、2月は「なかなか大きく動くこともある」ようで、このあと月末に向けての動意も期待されている。

◎1月相場は期待外れの「小動き」、ただ今年は逆に「年間小動き」からの脱却か!?

2月相場の特徴についてレポートするうえで、まずは勝敗・星取表をみておく。1990年以降昨年まで過去30年は14勝16敗となっており、ほぼ五分五分の内容。

ただ、別の特徴を調べてみると、「動くときには大きく動くが動かない年はまったく動かない」—という両極端になり易い傾向が強くなるのがわかった。

たとえば、2009年の2月は月間変動9.76円で年間を通してもっとも動いた1ヵ月となっていたほか、2012年の2月も年間でもっとも変動した月。また、2016年は順位的に年間3位に留まったものの、月間の変動幅は10.45円とかなり大きな動きを記録しているうえ、2018年の2月は月間変動幅4.93円となり、年間2位の変動を記録していた。

その反面、2014年は逆に「動かない年」。月間を通した変動はわずかに2.1円で年間10位の小変動、また2017年も月間変動幅は3.36円、同9位に終わるなど、年間を通して動きの鈍い1ヵ月だった。まったく動かない2月相場にも一応要注意だ。

なお、いま一度1月相場の話に戻るが、筆者は1月8日付のレポートで、「1月の荒れ相場は、年間を通した小動きの予兆」—と指摘した。これは、昨年までの過去3年、年間を通しドル/円がかなりの小動きをたどるなか、何故か1月相場のみ「大荒れ」。実際それは、各年とも1月相場の変動が、その年1位の変動を記録していたことにも示されている。

そんな経験則を踏まえたうえで、今年の1月相場を振り返ってみると、変動幅は2.65円にとどまっており、通常であれば「小動き」だったと言えそう。つまり、過去3年の経験則を打破、あるいは呪縛が解けた可能性もある。やや「我田引水」であることは否定しないが、そうした意味でも2月以降の大相場を是非とも期待したいところだ。

一方、2月の出来事を調べてみると、過去の2月は重要事象それも為替や金融に関することが多いことがわかった。

一例を挙げると、「日本が新円へ切り替え(1946年)」、「ドル/円が変動相場制へ移行(1973年)」、「ドル安に歯止めをかけるルーブル合意(1987年)」、「G7声明で『ドル安は正終了』を宣言(1997年)」などのほか、比較的最近には「G7が『為替は市場で決定されるべき』との緊急共同声明を発表(2013年)」が起こっている。また、株式に関しても、「日経平均株価がブラックマンデー以来の暴落、前日比1569.10円安を記録(1990年)」、「中国発で世界同時株安発生(2007年)」、「NYダウが終値で1175ドル安と史上最大の下げ幅記録(2018年)」—など、かなり興味深い出来事が相次いでいた。

もちろん、こうしたことは毎年起こるものではないことは重々承知している。しかし、足もとの市場を「新型コロナウイルス」に関するニュースが席卷するなど、何が起ころうとも不思議ではない状況だ。リスク要因として頭の片隅に留めておいて損はない気もしないではない。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

